

曹操



孟徳
（幼）阿瞞公 武帝
一五五〜二〇〇

豫州沛国譙県
武帝紀魏書一

魏の太祖。祖父の曹騰は、桓帝擁立に功績があり、宦官でありながら、多くの人材を抜擢した。無名の曹操を評価し、その理想となる橋玄を推挙した種暲は、その一人である。父は夏侯氏から養子に入ったとされる曹嵩で、太尉に至った。

熹平三（一七四）年、曹操は二十歳で孝廉に推挙されて郎となり、洛陽北部尉に任ぜられ、宦官の係累さえ処刑する猛政で名声を得た。一八四年、黄巾の乱が起こると騎都尉になり、潁川郡の黄巾を討伐して、濟南国相に昇進した。

中平五（一八八）年、靈帝が新設した西園八校尉の一つ典軍校尉に就任したが、翌年、董卓が献帝を擁立して政權を壟断すると、陳留郡で挙兵する。一九〇年、反董卓連合において曹操は、袁紹から行奮武將軍に推薦された。かつて橋玄の紹介により、許劭の人物評価を受けた曹操は、何顛を中心とする名士グループで袁紹・荀彧・許攸らと交友していたためである。袁紹が董卓と戦わない中、曹操は洛陽への進撃を唱えたが、滎陽の戦いで、董卓の中郎將の徐栄に敗れた。それでも、漢の復興のために董卓と戦ったことは、のちに献帝を擁立する正当性を

政治的正統性となる献帝を有し、河南の豫州・兗州を支配して、袁紹と全面的に戦い得る態勢を整えた。

建安五（二〇〇）年の官渡の戦いでは、降服してきた旧友の許攸が立てた烏巢急襲策を採用して勝利を納めた。ただし、その勝利は、許で献帝を守り、兵糧を供給し、名士間のネットワークを活用して袁紹陣営の情報を取集・分析した荀彧の功績に大きく依存する。この時期、曹操と荀彧は、志を共にしていた。

ところが、建安十三（二〇八）年、赤壁の戦いに敗れ、五十八歳の曹操が中国統一より、君主権力の強化と後漢に代わる曹魏の建国を優先すると、両者の関係は悪化する。董昭から曹操を魏公に推薦する相談を受けた荀彧が、儒教的理念を掲げてこれを非難すると、両者の対立は決定的となった。同十七（二二二）年、孫権討伐の途上、曹操は荀彧を死に追い込む。

曹操は、名士の価値観として絶対的な位置を持つ儒教が漢を正統化していたことを嫌い、儒教の相対化を目指す。儒教とは異なる価値観を尊重することで、儒教に圧力をかけていく。荀彧を死に追いやった二年前、曹操はすでに人材登用の方針として、儒教の登用方針とは異なる唯才主義を掲げていた。さらに曹操は「文学」を宣揚する。曹操のサロンから発展した建安文学は、中国史上初の本格的な文学活動となった。曹操は、五官将文学など「文学」を冠する官職を創設し、また文学の才能を基準に人事を行った。さらに、文学の才に秀でた曹植を寵愛し、

を支え、漢の護持を願う名士に曹操の存在を知らしめた。

河北を制圧していく袁紹を見て、曹操は黄巾の盛んな河南に出る。一九二一年、兗州牧となり、青州黄巾を破って、兵三十万、民百万を帰順させる。これを編成したものが、曹操の軍事的基盤となった青州兵である。このころ荀彧が加入する。名士本流の荀彧が、袁紹を見限り曹操に仕えたことにより、多くの名士が集団に参入し、曹操は順調に勢力を拡大した。それを嫌った袁術の侵入に反撃すると、徐州牧の陶謙が曹操の父を殺して報復する。公孫瓚・陶謙・孫策の袁術派と曹操・劉表の袁紹派とが抗争していたためである。親を殺された曹操は、民を含めた大虐殺を行い、名士に失望される。焦った曹操が虐殺を批判した兗州名士の辺讓を殺害すると、陳宮と張邈は呂布を招き、曹操に敵対して兗州をほぼ制圧した。

荀彧は、程昱・夏侯惇と共に拠点を死守した。一年余りをかけて兗州を回復した曹操に、荀彧が正統性の回復策として献帝の擁立を主張する。一九六六年、献帝を迎えた曹操は、名士の支持を次第に回復した。さらに、荀彧は、兗州にあった拠点を豫州の潁川郡許昌に移すことを勧める。曹操は、許に都を置くと共に、周田屯田制を始めた。軍隊ではなく、一般の農民に土地を与える民屯は、隋唐の均田制の源流となる。また、戸ごとに布を調として取る税制は、租庸調制の源流となっていく。

こうして曹操は、軍事的基盤の青州兵、経済的基盤の屯田制、一時は後継者に擬することもあった。文学は、こうして儒教とは異なる新たな価値として、国家的に宣揚された。曹操の著した楽府は、自らの正当性を奏でる手段であった。

荀彧を殺した翌建安十八年、曹操は魏公に封建され、九錫（天子に匹敵する九種の礼）を受けた。魏国の社稷と宗廟を建て、二人の娘を献帝の夫人とした曹操は、同十九年に献帝の伏皇后を廢位し、伏皇后の二子も殺害する。二十年、娘の曹節を献帝の皇后に立てると、二十一年に魏王の位に即く。

建安二十五（二二〇）年一月、魏王曹操は、洛陽で薨去すると、高陵（西高穴二号墓とされる）に葬られた。

曹操は儒教一尊であった後漢の価値基準を打破して、多くの文化に価値を見出した。『孫子』に注を付け、新しく作った楽府を管弦にのせて唱和させた。また、草書と囲碁を得意とし、五斗米道に興味を抱き、養生の法を好み、方術の士を招いた。

曹操の存在の故に、三国時代は歴史の転換点となった。政治的には、四百年の統一国家である漢が崩壊し、三百七十年に及ぶ魏晉南北朝の分裂の中で、名士を母体とする貴族が支配階級となる。経済的には、隋唐律令体制に結実する屯田制などの土地制度や税制度が整備される。文化的には、儒教一尊は崩壊し、仏教・道教が盛んとなり、文学・書画が新たな価値として定着していく。これらはすべて曹操に源を発するのである。

「非常の人、超世の傑」と、その才能を高く評価する。

蜀の歴史概略

一八四年

傭兵集団

蜀漢を建国した劉備は、黄巾の乱の際、関羽・張飛と共に兵を挙げた。二人と劉備との関係は、「寝る時には牀(寝台)を共にするほどで、兄弟のような恩愛をかけた」と伝えられる。三人は、君臣を超えた兄弟のような関係にあった。こうした関係は、趙雲と劉備の間にも見られ、諸葛亮を迎える以前の劉備の臣下団の特徴である。

この時期の劉備集団は、配下に名士が居つけないため、根拠地の支配が安定せず、傭兵として群雄の間を転々とした。かれらと名士との関係は、次の話から窺い得る。張飛はある日、劉巴のもとに泊まりにいった。ところが、劉巴は、張飛と話もしないので、張飛は怒って帰ってしまった。諸葛亮は劉巴に、「張飛は武人とはいえ、あなたを敬愛しています。少しは下の者にも配慮をして下さい」と言った。劉巴は、「われわれは、世の中の英雄と交際すべきであつて、どうして兵士(兵隊野郎)なんかと一緒に話すことができるものか」と答えたという。劉巴にとって、張飛は「兵士」に過ぎず、共に語るに足りる存在ではなかった。

劉備は、公孫瓚のように名士を受け入れない態度を示したわけではない。むしろ、名士を尊重していた。したがって、一時的ではあつたが豫州・徐州をえると、陳羣・陳登という当時を代表する名士を迎えている。しかし、かれらは劉備がそれらの州を失うと集団に留まり続けることはなかった。名士が、本籍地を捨ててまで随従する魅力や将来性が、劉備とその集団には欠けていたのである。また、劉備も陳羣の献策に従わなかった。関羽・張飛を差し置いてまで、名士の進言に従える集団でもなかった。こうして劉備集団に名士は留まり続けず、劉備は傭兵として群雄の間を渡り歩き、官渡の戦いで袁紹の味方をして敗れたのち、結局、荊州の劉表を頼ることになった。

劉表政権は、襄陽の名士蔡瑁や南陽の名士蒯越に支えられて安定しており、平和を求め多くの名士が荊州に集まっていた。後に劉備を支える諸葛亮も、徐州から荊州に移り住んでいた。諸葛亮は、蔡瑁のめいを妻としたほか、姉を龐徳公の子龐山民に嫁がせ、襄陽を代表する豪族の蔡氏・龐氏と婚姻関係を結んでいた。そして、司馬徽より「荊州学」を学び、龐徳公より「臥龍」と評され、「鳳雛」の龐統と、襄陽グループと呼ぶべき名士集団の中で高い評価を受けていた。

臥龍

二〇二年

髀肉の嘆

二〇七年

三顧の礼

水魚の
交わり

二〇八年

長坂の戦い

呉と同盟

一方、劉備は焦っていた。長いこと馬に乗らなかつたため、股の内側に贅肉が付いたことを嘆く「髀肉の嘆」という言葉が生まれたのも、この時期である。しかし、客将という立場で、劉表の臣下を自己の部下にすることはできない。したがって、高い名声を持ちながらも、劉表では天下を統一できないと考へて距離を保っている襄陽グループの名士は、格好の接近対象であつた。また、襄陽グループ側も、劉備がこれまで掲げてきた、漢の一族として漢室を復興するという大義名分と、曹操も認める英雄としての資質に、興味を持った。こうした両者の思いが、劉備が諸葛亮を迎えるときに尽くした「三顧の礼」を巡る駆け引きとなつて展開されるのである。

劉備が諸葛亮を招聘するために尽くした三顧の礼は、皇帝が老儒者を迎える時の礼であり、無官の青年への礼としては重過ぎる。襄陽グループの徐庶が、諸葛亮、ひいては自分たち名士を劉備に高く売るために、三顧の礼を尽くさせたのである。名士諸葛亮は、君臣関係とは別の場で成立する「臥龍」という名声を存立基盤としていた。諸葛亮の権威を保つには、名声という目に見えない力への劉備の尊重を三顧の礼という形に現す必要があつたのである。三顧の礼により、自分の尊重を天下に、そして関羽と張飛に宣言させた諸葛亮は出仕する。そして、荊州・益州を領有し、孫呉と同盟して曹魏と戦う「草廬対」と呼ばれる基本方針を披露して、劉備集団の方向性を定めた。ここに劉備集団は、関羽・張飛を中心とする傭兵集団から名士諸葛亮を中心とする政權へと質的に転換し始めた。したがって関羽と張飛は、不満を募らせた。それに対して劉備は、「諸葛亮と私は水と魚の関係である」と弁明した。すなわち劉備は、水がなければ生きていけない魚のように、諸葛亮ら名士の支持がなければ、荊州で勢力を拡大できなかったのである。曹操が袁氏を滅ぼして南下し、劉表が病死すると、新野に駐屯していた劉備は、曹操に追われ江陵に逃れる。劉備を慕つて続々と民が合流し、当陽に至るまでには、十万余に膨れ上がった。劉備は、関羽に水軍を与えて江陵に向かわせ、諸葛亮を孫権へ使者として派遣した。曹操は騎兵を選びすくつて劉備を急追し、長坂坡で決戦となった。曹操は、民を含む劉備軍をほしいままに殺戮した。趙雲が阿斗(後の劉禪)を守つたのは、このときである。また、しんがりを務めた張飛は、わずか二十騎を率いて長坂橋を切り落とし、川を背にして立ちほだかる。「わたしが張益徳である。やつてこい。死を賭けて戦おうぞ」と叫ぶと、曹操軍から近づくる者は、誰一人もなかったという。

張飛の活躍により、劉備が夏口に到着したころ、諸葛亮は孫権に同盟を持ちかけていた。それを助けたのは、目的

正史

魏

蜀

呉

後漢書

名場面四十

思想と文学

魏志倭人伝

資料

索引